



発展への足固め(2)
(昭和36年～41年)

高度経済成長下、種々の整備事業に着手

昭和30年代は、かつてない高度経済成長時代を迎え、昭和39年にはアジアで初めてのオリンピックを開催。一方市内では、昭和30年代後半から成田山新勝寺の新本堂、宗吾御一代記館の建設事業が始まり、「観光地成田」も空前の盛り上がりを見せました。

昭和35年、2期目を迎えた藤倉市政は、観光客誘致・市民生活基盤の整備を目的として、道路交通網の整備、鉄道の電化・複線化の陳情を積極的に行い、また、農業の近代化、商工業の振興のための企業誘致、教育行政の諸問題などの重要課題に取り組みました。

駐車場問題と道路建設

学校の校庭が臨時駐車場に

合併時から懸案事項であった駐車場問題。昭和35年に成田山が周遊指定地に指定されると、参詣客はさらに増加し、特に観光バスなどの大型車の受け入れは深刻な問題でした。昭和29年の市営第一駐車場(現栗山公園)、翌30年には宗吾駐車場、同37年には新勝寺と土屋に大型バス駐車場を設置。同40年12月には市営第二駐車場(現東和田駐車場)が完成しました。

道路整備は、昭和30年度から特別失業対策事業として行われ、千葉・水戸線(現51号)が沿線住民の再三の要請により、昭和37年に一級国道に昇格し、北総開発の発展に期待が寄せられました。



参詣客の増加で、中学校の校庭までが観光バスの臨時駐車場に(昭和30年代中ごろ)



昭和38年5月に完成した並木町地先の不動橋。わずか12mの橋だが、並木町と市役所下までが完全に結ばれ現在の国道51号のルートになり、交通緩和に大きな期待が寄せられました

商工業の振興と工場誘致

市域に新しい工場が進出

国内では高度の経済成長の波を受け、産業構造・消費生活も大きく変わりました。しかし、本市では依然として農業が主要な産業でした。市内の工業の中心は、ようかんを主とする小規模食品工業でした。そのため、新たな雇用には限界があり、市の財政強化を図るためにも工場誘致は不可欠でした。昭和36年には不動ヶ岡(現南平台)にエスエス製薬が進出。同38年には大日精化が並木町に進出しました。その後、野毛平地区・豊住地区に工業団地が造成されるなど内陸型の工業地帯が形成されました。



成田市進出第1号となったエスエス製薬成田工場(昭和37年)

電話のダイヤル化に伴い機械の調整を行う係員



通信事業

電話の自動ダイヤル化

昭和41年11月、幸町に新しい電報電話局が開設され、全国即時通話が可能となりました。このときの電話加入数は、2,110軒。公衆電話も設置され、以後急速に普及し、経済・産業の進展に大きな期待がかかりました。それまでは交換手に相手の番号を告げ、手動で接続する磁石式と呼ばれるものでした。東京への通話に1〜2時間待つこともありました。

11月22日に成田山信徒会館で行われた自動化開通記念式では、藤倉市長と北海道浜森稚内市長との間で記念通話が行われました。



東小学校での給食風景(昭和39年)

県下最大規模を誇る成田市給食センターが完成

全国規模で行われた農業革命

農業構造改善パイロット事業

農業機械の普及、農業従事者との生活水準の格差など、昭和30年代の農業は大きな転換期を迎えました。生産性の向上と所得倍増を目指し、昭和36年には豊住地区がパイロット地域に指定され、協業による経営の近代化や、約40haの土地基盤整備が進められました。



豊住地区の協業牛舎

教育・文化

音楽教育で優れた成果、文化財では大発見が

三里塚小学校、公津小学校、成田小学校などが東日本大会・全国大会の音楽コンクールで相次いで入賞。考古学では、昭和37年八代花内遺跡から、東日本初の玉工工房址が確認されました。日本最初の百科事典といわれる『和妙類聚抄』の下総国埴生郡玉作郷の地名と一致し注目を浴びました。



「全国子ども音楽コンクール」で準優勝した三里塚小学校(昭和36年)

学校給食

県下最大の給食センターが完成

学校給食は、昭和34年公津小学校で最初に始められ順次拡大。

学校給食は栄養上の問題だけでなく、学校生活を豊かにし、人間教育の観点からも再認識され、早期実施の強い要望がありました。同40年には、センター方式による市内の小中学校の完全給食が計画され、同41年には寺台に県下最大の給食センターが完成、同43年から完全給食が実現しました。

